

# 副詞「タブン」と「タイテイ」のモダリティ階層

杉村 泰

キーワード 副詞、命題、モダリティ、タブン、タイテイ

## 1. はじめに

本稿は事態の蓋然性を表す副詞「タブン」と「タイテイ」の意味について、日本語モダリティ論の立場から考察したものである。日本語モダリティ論では、文は「話し手が切り取った客体世界の事態」を描く「命題」と、「発話時点における話し手の心的態度」を表す「モダリティ」からなると考える。両者は「モダリティ」の中に「命題」が埋め込まれるという意味構造をとっている。<sup>1)</sup>

[[[ 命題 ] 命題態度のモダリティ ] 発話態度のモダリティ ]

このような立場から、本稿では同じ蓋然性（ある事態の成立する可能性の度合い）を表す副詞でも、「タブン」はモダリティに属するモダリティ副詞、「タイテイ」は命題に属する命題副詞であることを明らかにし、両者の違いについて分析する。

まず「タブン」と「タイテイ」の意味の異同について確認する。『日本語大辞典』（講談社）は両者の意味について次のように記述している。

た-ぶん [多分] ㊦ (名) ①多いこと。たくさん。相当。a lot of ㊦の寄付をいただく。②その中の大部分。多くの例。the most part ㊦ おそらく。たいてい。おおかた。probably ㊦ 駄目でしょう。

たい-てい [大抵] ㊦ (名) ①おおよそ。おおかた。たいがい。mostly ㊦ の人々。②((下に打ち消しをともなつて))ひととおり。なみなみ。ふつつう。ordinary ㊦ のことでは負けない。㊦ (副) ①たぶん。おそらく。Probably ㊦ だいじょうぶだろう。②ほどほど。㊦ うそも一にしる。

このうち、「タブン」の□と「タイテイ」の□①は、その意味記述にお互いの語を用いている。このことは二語が類義語として意識されていることを示す。実際、例文(1)、(2)の「タイテイ」は「タブン」に置き換えることができる。

- (1) 「試験は たいてい／タブン 通るだろう」(『現代国語例解辞典』第二版)<sup>2)</sup>
- (2) 「でも、大てい／タブン 大丈夫でしょう。明倫なら、大したもんですわ。お父さまもお母さまもさぞかしご安心でしょう」(曾野綾子『太郎物語』)

ただし、「タイテイ」がこの意味で使われるのは一般的な用法ではない。

- (3) 登場する山本屋旅館の人々は、今はもう別の土地に引っ越してしまい、多分／\*タイテイ 2度と私はあの人たちと共に生活することはないと思う。(吉本ばなな『TUGUMI』)

一方、「タイテイ」が□の①の意味で使われる場合、「タブン」に置き換えることはできない。次の例文において「タイテイ」が事態の頻度を表すのに対し、「タブン」は事態の推量を表すという違いがある。さらに「タイテイ」の場合、その事態は発話時点において既知のものであったと解釈されるのに対し、「タブン」の場合は未知のものであると解釈されるという違いがある。

- (4) 彼女は頭が良く勉強家で、病欠のわりには たいてい／タブン 成績は上位だったし、あらゆる分野の本を読みあさっていて知識が深かった。(吉本ばなな『TUGUMI』)
- (5) ひとつひとつの格助詞はそれぞれ異なる機能を担うが、ひとつの助詞がひとつの関係しか表さないというわけではない。たいてい／タブン いくつかの意味も持っている。(森本順子『日本語の謎を探る ——外国人教育の視点から』)

以下、このような「タブン」と「タイテイ」の違いについて分析する。

## 2. 先行研究

森田 (1989) は「オソラク、タブン」と「タイテイ、タイガイ」、および「オオカタ」について、次のように説明している。

### おそらく たぶん

両語とも「きっと」に比べて弱い推量。「恐らく」は丁寧な文体に用いられる。(後略) (森田1989: 374)

### たいてい たいがい

「大抵」「大概」とも、推量としても用いるが、本来これらの語は“大部分”“おおかた”“あらまし”の意味で用いられる。したがって「たいてい大丈夫だ」「たいがい大丈夫だ」は“十中八、九という高い確率で大丈夫であろう”という確率の高さを表す。

「彼はたいてい欠席だ」は、出席ではなく欠席であることを、「梅雨時だから、たいがい雨だ」は、晴天ではなく雨天であることを、単なる推量からではなく、“十日のうち八、九日は欠席だ／雨だ”と比率意識から述べているのである。(森田1989: 374-375)

### おおかた

「大方」は「大方の予想を裏切って……」「おおかた(の)見当はつく」のように「ほとんど」の意味である。推量として用いるときも、「あらかた」「ほとんど」の意味として、その事柄の比率の高さを述べる。

「おおかたそんなことだろうと思った」「今度の連休はおおかた雨だ」など。(森田1989: 375)

森田は、「タブン」は「キット」より弱い推量を表すと説明している。しかし、「キット」が推量文だけでなく意志文、命令文、勧誘文にも使われるのに対し、「タブン」は推量文にしか使われないため、単に推量判断の強弱では説明できないと考えられる。(6. 1節で論じる)

また、森田は「タイテイ」、「タイガイ」、「オオカタ」について、これらは本来確率、比率の高さを表す副詞で、推量に使われる場合も確率、比率意識で使われるとしている。本書でもこの指摘に従い、この点で「例外なく」という意味を表す「カナラズ」と性質を異にすると考える。(6. 3節で論じる)



ウダ]、「ラシイ」とは意味的に衝突を起こす。

- (9) a. 明日はタブン雨が降る { $\phi$ /ニチガイナイ/ダロウ}。  
 b. <sup>?</sup>明日はタブン雨が降る {カモシレナイ/ヨウダ/ラシイ}。

「タブン」と「カモシレナイ」、「ヨウダ」、「ラシイ」（、「ミタイ」）との共起は、実例には存在しても不自然な表現である。

- (10) <sup>?</sup>内容はもうすっかり忘れてしまったのですが、たぶん人の生死か恋愛のことだったかもしれません。(劉1996：渡辺淳一『阿寒に果つ』)  
 (11) <sup>?</sup>「先輩から、こうだあだ*って*いわれても、たぶん耳には*い*ってないみたい、もう手は痛いわ、で。ナイフ研げるまで三年はかかるから、きれいに切れるまで、最初のうちは、毎日研ぐ練習するんですよ」(鎌田慧『ドキュメント屠場』)

一方、「タブン」は「ダ/ $\phi$ 」、「ニチガイナイ」、「ダロウ」とは自然に共起する。

- (12) 一体何が原因だったのか、たぶん熱と頭痛に冒されて、正常な判断力を失ってしまったのだ。(鈴木光司『リング』)  
 (13) 「あなたのすぐそばに人影が見えます それは生身の人間ではなさそうだ たぶん霊にちがいない」(手塚治虫『ブッタ⑩』)  
 (14) 「まあ別に、毒でも劇薬でもないし。それで、たぶん地震の時に、研究室でビンが割れたんやろうってことになって」(貴志祐介『十三番目の人格-ISOLA-』)

ところで、先行研究では「タブン」が「ダ/ $\phi$ 」と共起するのを不自然であるとするものもある。これに関して工藤（1982）は次のように論じている。

たとえば「たぶんあしたは晴れる。」や「たぶん晴れそうだ」などをくたぶん…だろう>の呼応の乱れとするような、あまりにも形式主義的（かつ規範主義的）な傾向と、その裏返しとしての、「本来陳述副詞はどんな述語と呼応するのが標準的な用法か、ということについて、あまり厳格なことは言えないような感じもする」というような、良心的ではあるが、懐疑的・消極的な傾向とを、同時に克服したいためでもある。(工藤1982：61)

本書でも「タブン～ダ/φ」は「タブン～ダロウ」の乱れではなく、あくまでも「タブン～ダ/φ」であると考ええる。

## 5. 一回的文脈と反復的文脈

次に一回的文脈と反復的文脈とで、「タブン」と「タイテイ」の読み（推量的機能、習慣的機能）にどのような違いが出るのかを見る。<sup>4)</sup> まず、「タイテイ」が現在文に使われる例から見よう。

- (15) a. ?彼は今日は調子がいいのでタイテイ勝つ。<sup>5)</sup>  
 b. 彼は将棋を指せばタイテイ勝つ。

例文 (15a) は一回的文脈の例である。これは一回性の事態であるため「習慣的読み」とはならず「推量的読み」となる。しかし、このような用法は会話などでまれに使われるものの多少不自然さは残る。この場合、一般には「タブン」を使うのが自然である。一方、例文 (15b) は反復的文脈の例であり、「習慣的読み」となる。これは文脈によって、事実をそのまま述べる文にもなるし、「推量的読み」が加わることもある。ここで強調したいのは、推量的機能と習慣的機能は相互排除的なものではなく、互いに独立した機能であるということである。したがって、場合によって二つとも機能することもあれば、いずれか一つしか機能しないこともあり、いずれも機能しないこともある。

次は「タイテイ」が過去文に使われる例である。

- (16) a. ?彼は昨日は調子よかったのでタイテイ勝った。  
 b. 彼は将棋を指せばタイテイ勝った。

例文 (16a) は一回性の事態であるため「習慣的読み」とはならない。「推量的読み」なら不可能ではないが、不自然な感じは残る。一方、例文 (16b) は「習慣的読み」となる。文末に推量を表す「φ」が付いていると考えれば「推量的読み」も可能である。

次は「タブン」が現在文に使われる例である。

- (17) a. 彼は今日は調子がいいのでタブン勝つ。  
 b. \*彼は将棋を指せばタブン勝つ。

例文 (17a) は一回性の事態であるため「習慣的読み」とはならず「推量的読み」となる。一方、例文 (17b) は反復的文脈の文としては非文となる。「キット」なら不自然ながらも使えるが、「タブン」は不可能である。

最後は「タブン」が過去文に使われる例である。

- (18) a. \*彼は昨日は調子よかったのでタブン勝った。  
 b. \*彼は将棋を指せばタブン勝った。

例文 (18a) は一回性の事態であるため「習慣的読み」とはならない。「彼は昨日は調子よかったのでタブン勝った (ダロウ)」の意味で取れば、「推量的読み」も可能であるが、その場合は「タブン」が過去文の中に入ったことにはならない。一方、例文 (18b) は、上の (17b) と同様に非文となる。

## 6. 「タブン」と「タイテイ」の意味

### 6.1 意志文、命令文、勧誘文と「タブン」

「キット」と「タブン」は推量の程度の高さの違いとして説明されることが多い。しかし、「キット」が推量文、意志文、命令文、勧誘文に使われるのに対し、「タブン」は推量文にしか使われないという違いがある。<sup>6)</sup>

- (19) a. 毎日 {キット / \*タブン} 学校に行きます。(事実文)  
 b. 明日は {キット / タブン} 学校に行くだろう。(推量文)  
 c. 明日は {キット / \*タブン} 学校に行くぞ。(意志文)  
 d. 明日は {キット / \*タブン} 学校に行けよ。(命令文)  
 e. 明日は {キット / \*タブン} 一緒に学校に行こうね。(勧誘文)

このことから、「タブン」は推量専用の副詞であることが分かる。(「キット」は推量、意志、命令、勧誘を包括し、事態の実現に対する話し手の強い信念を表す。)

### 6.2 「タイテイ」の二類型

「タイテイ」の意味は、反復的文脈と一回的文脈の二つに分けて考えると理解しやすい。反復的文脈ではその事態が大部分の場合に成立することを表すのに対し、一回的文脈ではその事態が大部分の条件の下で成立することを表す。

- [反復的文脈] 場面1、場面2、場面3、…… 大部分の場面で成立  
 [一回的文脈] 条件1、条件2、条件3、…… 大部分の条件の下で成立

たとえば、例文(20a)は「太郎が9時に会社へ行く」という事態が、昨日、今日、明日…、という時間の中でほとんどの場合に成立することを表し、例文(20b)は「太郎が9時に会社へ行く」という事態が、雨が降ろうが、槍が降ろうが、病気になるうが…、という様々な条件の下でほとんどの場合に成立することを表す。

- ⑳ a. 太郎は毎日タイテイ9時に会社へ行きます。(反復的文脈)  
 b. 太郎は明日はタイテイ9時に会社へ行きます。(一回的文脈)

このように、「タイテイ」は「ある事態が例外はあるものの大部分の場合に成立することを表す」という意味を持ち、それが反復的文脈ではその事態が大部分の場合に成立することを表し、一回的文脈ではその事態が大部分の条件の下で成立することを表すのである。ただし、「タイテイ」を一回的文脈で使うのはあまり一般的な用法ではなく、その場合、推量文にのみ使われ、十中八九の確率で事態の成立することを表す。

### 6.3 「カナラズ」と「タイテイ」

同じ命題副詞に属す「カナラズ」と「タイテイ」でも、「カナラズ」が事態の成立を100パーセント確実なものとして捉えているのに対し、「タイテイ」は事態の成立を大部分認めているものの、成立しない可能性も残しているという違いがある。しかし、「カナラズ」と「タイテイ」は蓋然性の高さという「量的」な違いの前に、次の二点で「質的」な違いを示している。第一点は、「カナラズ」が一回的文脈にも反復的文脈にも広く使えるのに対し、「タイテイ」は反復的文脈に使うのが基本であるという点である。第二点は、「タイテイ」が「タイテイの+名詞」という形をもつのに対し、「カナラズ」は「カナラズの+名詞」という形をもたないという点である。

以下、副詞「タイテイ」は「タイテイの+名詞」の意味を「タイテイ」一語で表したものであると考えられることを主張する。次の例文㉑は、「カナラズ」が一回的文脈で使われた例で、「死ぬ」という事態が確実に成立することを述べている。ここで興味深いのは、「カナラズ」を「タイテイ」に置き換えると、「タイテイの場合は死んでしまう」あるいは「タイテイの細胞は死んでしまう」という意味になり、一回的文脈から反復的文脈に変わってしまうということである。

ある。

- (21) 生き永らえるのは受精した生殖細胞だけで、あとの細胞はいずれ寿命が来て |かならず/タイテイ| 死んでしまう。(養老孟司・長谷川真理子『男の見方 女の見方』)

この点については「タイテイ」の名詞用法から考えることができる。「タイテイ」には「タイテイの」、「タイテイは」といった名詞用法があり、「大部分の」、「大部分は」という意味を表す。一方、「カナラズ」にはこのような名詞用法がない。

- (22) |たいていの/\*カナラズの| 初級教科書ではバ形をまず最初に教えるようだ。(森本順子『日本語の謎を探る ——外国人教育の視点から』)
- (23) 「きみせっかくだがこの子の前では |たいていの/\*カナラズの| おどしは役に立たないからね」(手塚治虫『鉄腕アトム⑩』)
- (24) 子どもは、自然性が高い。早い話が、思うようにならないのである。子どもを持ったことのある人なら、|たいていは/\*カナラズは| それを知っている。(養老孟司・長谷川真理子『男の見方 女の見方』)
- (25) 解放山ホテルの広い食堂に行くと、黒人留学生が静かに食事をする姿を見ることができる。「第三世界の盟主」を任ずる北朝鮮ならではの光景である。朝鮮語を学ぶ外交官の卵、「先進的」な農業技術や工業技術を習得する者、それに芸術を志す者もいる。|たいていは/\*カナラズは| 有力者の子弟で、自国ではエリートである。(李英和『北朝鮮秘密集会の夜』)

この「タイテイの+名詞」が「タイテイ」一語で表されたものが、副詞用法の「タイテイ」であると考えられる。事実、次の例文(26)~(28)の「タイテイ」は「タイテイの場合」で置き換えることができる。

- (26) 最近は少なくなったようだが、昔はたいてい町内に一人や二人は“偏屈おやじ”がいたものだ。(相馬達雄『この一冊で「民法」がわかる!』)
- (27) 寝つかれないとき、わたしは、「羊が一匹、羊が二匹……」と数えると、たいてい、百ぐらいまで数えるうちに、寝てしまうんですが、昨晚は千、二千と数えても、寝つかれませんでした。(福田健『ユーモア話術の本』)
- (28) 捜査二課による逮捕—送検(検察庁に身柄を送ること)—拘留(最長で二〇日間)—起訴の手順で処理され、検事が直接調べに乗り出すのはた

いてい最終的な証拠固めの段階だ。(魚住昭『特捜検察』)

同様に、「タイテイは」も「タイテイの+名詞+は」で置き換えられる。例文(29)の「タイテイは」は「タイテイの人は」あるいは「タイテイの場合は」で置き換えることができる。

- (29) 時には、対立候補者の熱心な支持者に出くわして険悪な雰囲気になったりもするが、大抵は有権者たちは候補者に心を開き、しばし政治談義に花を咲かせる。(『中日新聞』1999. 11. 13 朝刊)

このような例を見ると、「タイテイ」と「カナラズ」では修飾の仕方が異なっていることに気づく。すなわち、「カナラズ」が命題全体を修飾し、その事態実現の確実さの程度を表すのに対し、「タイテイ」はある一つの名詞を修飾し、その名詞の集合のうち「大部分」がそれに該当することを表すのである。それが一語化して副詞用法となったものが副詞の「タイテイ」であると考えられる。

「タイテイ」が「タイテイの+名詞」から一語化してできたものであることは、「タイテイ」が状態性の事態、否定的事態に使えることから証明される。「カナラズ」が過去の一回的事態、状態性の事態、否定的事態のいずれにも使えないのに対し、「タイテイ」は過去の一回的事態には使えないが、状態性の事態、否定的事態には使うことができる。

- (30) 太郎は昨日は {\*タイテイ/\*カナラズ} 会社へ行きました。(過去の一回的事態)
- (31) この店のケーキは {タイテイ/\*カナラズ} おいしいのに、今日はまずい。(状態性の事態)
- (32) 太郎は {タイテイ/\*カナラズ} 会社へ行きません。(否定的事態)

例文(31)、(32)の場合、「タイテイ」は直接「おいしい」や「行きません」を修飾するのではなく、「タイテイの場合おいしい」、「タイテイの場合行きません」のように、裏で「場合」を修飾していると考えられる。なお、「タイテイ」が一回的事態に使えないのは反復の意味を表すためである。

#### 6. 4 「タイテイ」、「タイガイ」、「オオカタ」

最後に「タイテイ」、「タイガイ」、「オオカタ」の違いについて考察する。まず、「タイテイ」と「タイガイ」の違いから分析する。2節で示したように森田

(1989) は両者を同じものとして扱っているが、飛田・浅田 (1994:253) は例文(33)を挙げて「「たいてい」は一般的な傾向を述べる暗示がある」と説明している。

- (33) a. ここまで言えたいがいわかるだろう。(大部分の人がわかるはずだ)  
 b. ここまで言えたいていわかるだろう。(普通の人ならわかるはずだ)

しかし、「大部分の人」か「普通の人」かは、文脈によってどちらとも解釈しうると思われる。単に人数の多さを述べる場合には「大部分の人」という意味になるが、そこから一般的傾向を引き出す場合には「普通の人」という意味になる。したがって、飛田・浅田の説明だけでは例文(33)の二つの文の違いは説明できない。

本稿では、両者の違いは「タイガイ」を使うと「大部分の人」という意味にも「大部分の話の内容」という意味にも取れるのに対し、「タイテイ」を使うと「大部分の人」という意味にしかならず、「大部分の話の内容」という意味には取りにくいという点にあると考える。すなわち、ある一つの話について「タイガイの話はわかる」と言えば、「大部分の内容はわかる」の意味で解釈できるが、ある一つの話について「タイテイの話はわかる」と言うのは不自然である。「タイテイの話はわかる」が自然に使えるのは、複数の話のうち大部分の話が理解できるという意味である。したがって、例文 (33b) が「タイテイの話」の意味で使われている場合、一回の話の中にいくつかの話題があり、そのうちの大部分の話題が分かるという意味で解釈される。

このことから、「タイテイ」と「タイガイ」では事態の切り取り方に違いのあることが分かる。つまり、「タイテイ」を使った場合には、集合の一つ一つを区別して「数的」に見ているのに対し、「タイガイ」を使った場合には、集合を全体として「量的」に見ていると考えられる。同じ「大部分の人」という意味でも、「タイテイの人」という場合には数的意識で述べられており、「タイガイの人」と言う場合には量的意識で述べられている。「タイテイ」と「タイガイ」の意味の違いを図1、図2に示す。

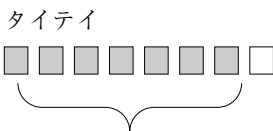


図1 「タイテイ」の意味

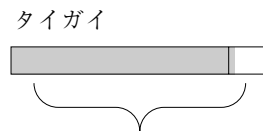


図2 「タイガイ」の意味

次に「オオカタ」との違いについて分析する。小林（1980：21）は「オオカタ」について「ある事柄の蓋然性の高さについての単なる判断」と説明している。しかし、「単なる判断」というのは漠然とした説明である。そこで次の例文で考えることにする。

(34) 太郎の話は {タイテイ／タイガイ／オオカタ} わかる。

例文(34)は次のような意味の違いがある。この文を自然に読むと、「タイテイわかる」は「大部分の場合に分かる」という反復的な読みとなるのに対し、「オオカタわかる」は「大部分の内容が分かる」という一回的な読みとなる。一方、「タイガイわかる」は「大部分の場合に分かる」という意味にも「大部分の内容が分かる」という意味にも解釈できるが、いずれの場合にも量的意識で述べられており、一回的な読みとなる。

「タイガイ」と「オオカタ」はともに一回的な読みとなるが、両者には次のような違いがある。「タイテイ」も含めて比べてみよう。

- (35) わが家の改修作業も {\*タイテイ／\*タイガイ／オオカタ} 完成に近付いた。
- (36) わが家の改修作業も {\*タイテイ／?タイガイ／オオカタ} 完成した。
- (37) A：今飛行機はどの辺りを飛んでいるのだろう。  
B：{\*タイテイ／\*タイガイ／オオカタ} 岐阜辺りだろう。
- (38) {\*タイテイ／\*タイガイ／オオカタ} の見通しをつける。

これらの文は「改修作業が完成する」、「飛行位置を岐阜と確信する」、「完全に見通しをつける」といった基準点にほぼ到達したことを表している。この場合、「タイテイ」と「タイガイ」は使えないため、両者には到達度を表す用法のないことが分かる。(例文(36)で「タイガイ」が多少使いやすくなるのは、到達度ではなく、どれくらい完成したのかという量を表す解釈になるためである。)一方、「オオカタ」は割合意識で述べられ、ある基準点を「100%」としてその基準点にほぼ到達したことを表す。先の例文(34)において「太郎の話はタイガイわかる」は量的に太郎の話が「大部分」わかることを表し、「太郎の話はオオカタわかる」は「太郎の話が全てわかるコト」を「100%」として、「割合」の面から「大部分」わかることを表していると考えられる。「オオカタ」の意味を図3に示す。

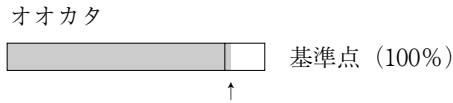


図3 「オオカタ」の意味

以上のように、「タイテイ」、「タイガイ」、「オオカタ」は同じ「大部分」という意味を持ちながらも、「数的」、「量的」、「割合」という異なる側面から世界を切り取っているのである。

## 7. まとめ

本稿で考察した副詞の意味は次のとおりである。

「タブン」(モダリティ副詞)

推量判断において直感的にある一つの帰結を導き出したことを表す  
(「キット」と違い、意志文、命令文、勧誘文では使えない)

「タイテイ」(命題副詞)

数的な面から、事態が大部分の場合に成立することを表す

- ・ 一次的文脈：その事態が絶対ではないがほとんど確実に成立することを表す

(推量文の場合に限られ、しかもあまり使われない用法である)

- ・ 反復的文脈：その事態が例外はあるもののほとんどの場合に成立することを表す

「タイガイ」(命題副詞)

量的な面から、事態が大部分の場合に成立することを表す

「オオカタ」(命題副詞)

割合の面から、事態が基準点に大部分到達したことを表す

## 注

- 1) 筆者のモダリティ観については杉村(2001)を参照。仁田(1991)や益岡(1991)が命題とモダリティを連続的なものと考えているのに対し、筆者

は両者を截然と二つに分けて考える。この点で、中右（1980）と同様の立場に立つ。

- 2) 例文の引用で「たいてい／タブン」のように記した場合、カタカナ表記の部分は筆者が付け加えたものである。
- 3) 「タブン」はそもそも疑問文には使えない。この点で「キット」が「ゼツタイニ」の意味で「太郎はキット10時に寝るのですか?」と言えるのとは異なる。
- 4) これは、森本（1994）が「キット」を推量的機能と習慣的機能に分けて論じたのに倣ったものである。なお、筆者は「キット」自体に推量的機能と習慣的機能があるわけではなく、それぞれ推量文、反復的文脈という文の意味に起因しているものであると考える。
- 5) 「タイテイ」は国語辞典類や森田（1989）では「タブン」と同じ推量の用法もあるとされている。しかし、この用法はあまり一般的ではないため、本稿では不自然な用法として「?」の記号を付けてある。
- 6) ただし、「キット」は推量文に使われるのが普通で、意志文、命令文、勧誘文に使われることは少ない。後者の場合、「ゼツタイニ」の方がよく使われる。王冲（2004）は「キット」の推量的用法と意志的用法について調査し、日本語母語話者は「キット」を推量用法として認識しやすいことを統計的に示している。

付記：本稿は杉村（1997, 2000）をもとに加筆修正したものである。

## 参考文献

- 梅棹忠夫・金田一春彦・阪倉篤義・日野原重明 [監修] (1989) 『日本語大辞典』、講談社
- 王 冲 (2004) 「日本語陳述副詞「きっと」と中国語語気副詞“一定”との対照研究 ——日本語教育における陳述副詞「きっと」の指導のために——」『人間文化論叢』7、pp.325-334、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科
- 工藤 浩 (1982) 「叙法副詞の意味と機能 ——その記述方法をもとめて——」『国立国語研究所報告71 研究報告集3』、pp.45-92、秀英出版
- 小林幸江 (1980) 「推量の表現及びそれと呼応する副詞について」『日本語学校論集』7、pp.3-22、東京外国語大学付属日本語学校

- 杉村 泰 (1997) 「副詞「キット」と「カナラズ」のモダリティ階層 ——タブン／タイテイとの並行性——」『世界の日本語教育』第7号、pp.233-249、国際交流基金日本語国際センター
- (2000) 『現代日本語における蓋然性を表す副詞の研究』、名古屋大学大学院文学研究科博士学位論文
- (2001) 「現代日本語における文末表現の主観性 ——ヨウダ、ソウダ、ベキダ、ツモリダ、カモシレナイ、ニチガイナイを対象に——」『世界の日本語教育』第11号、pp.209-224、国際交流基金日本語国際センター
- 中右 実 (1980) 「文副詞の比較」、国広哲弥 (編) 『日英比較講座第2巻 文法』、pp.157-219、大修館書店
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 林 巨樹 [監修] (1993) 『現代国語例解辞典第二版』小学館
- 飛田良文・浅田秀子 (1994) 『現代副詞用法辞典』東京堂出版
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』くろしお出版
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』角川書店
- 森本順子 (1994) 『話し手の主観を表す副詞について』くろしお出版
- 劉婧 (1996) 『陳述副詞の研究 ——話し手の確信度を表す副詞を中心に——』名古屋大学修士学位論文

